

解 答

一

- 問一 イ 問二 a ウ b ア 問三 エ
問四 あ イ い オ う ウ 問五 エ
問六 られる 問七 ウ 問八 映画・インターネット
問九 A エ B ア 問十 風景を美しいと感じて見ること

二

- 問一 こんな時 問二 ぎょうじ 問三 引き分け
問四 ウ 問五 イ 問六 エ
問七 ア 問八 父親 問九 イ

問十 信一の眼を傷つけたことで源太に殺されるほど責められるにちがいないと恐れおののいていたところへ、誠二をかわいがってくれる優しい信一のお母さんが現れたので、安心して気がぬけている。

問十一 信一に怪我をさせたのは勇ちゃんなのに、誠二が、信一と角力をとったことが怪我の原因であるかのような言い方をして、信一のお母さんに謝ったこと。

問十二 身代わり

問十三 A 信一に怪我をさせたことの謝罪をした B 勇ちゃんの罪を着た

三

- 問一 エ
問二 ものに対して淡白になっている〔こと〕 物欲のとりこになっている〔こと〕
問三 ものの生命を大事にしない暮らし 問四 親と子
問五 人間同士の心のつながり 問六 a オ b エ c ウ
問七 イ 問八 やらされる〔仕事〕
問九 生きた自然の中から与えられたものをもとに生活しているので、ものは自然に返すことができ、ゴミの問題が起ころないこと。

四

- 1 遺失物 2 勤勉 3 候補 4 仮装 5 発揮 6 集落

解 説

一 出典は、田中真知「美しいとさがす旅に出よう」

筆者はアフリカのスーダンでの体験を例にとりあげて、人の美意識はその人の属する文化に作られるのではないかと述べています。

問一 「いぶかしむ」とは、どうも変だとあやしく思うことです。傍線のあとに、「『なにもないよ』といって顔を見合せて不思議そうにしている」とあります。なにもないところを撮ってどうするのだろうと不審に思っているのです。

問二 a 「気にとめる」で、忘れないように気をつける意味になります。

b 「目をこらす」で、よく見ようと、注意してじっと見つめる意味になります。

問三 「生活」は、「生」も「活」もともに「生きる」という意味です。

問四 a 「わざわざ」は、ふつうならしないようなことをとくにするとときに使います。

い 「だいたい」は、「もともと」とか、「もとはといえば」という意味です。

う 「ろくろく～ない」の形で、「まともに～ない」という意味です。

問五 次の形式段落のはじめの文に「考えてみれば、ぼくだって子どものころ、風景を見て美しいと感じたことなんてなかった」とあります。子どもは「ウシを撮る」ことは理解できても、「風景を撮る」ことは理解できなかったのです。

問六 「自発」の助動詞「られる」を入れましょう。

問七 美を感じる能力は「感性」です。

問八 「本文中にない」という条件を見落とさないでください。「映画」や「インターネット（パソコン）」などがあてはまります。

問九 A 1行前に「すり込まれていく」とあります。何を美しいと感じるかは、たいていは文化の中で育まれていくと言うのです。

B スーダンの子どもたちは、「風景」を美しいとする文化の中で育っていません。しかし、放牧に出かけたり、生活の中で話題になったりするウシは、自分たちの「文化の一部」なのです。

問十 「それ」とは「風景」のこと、「味わう」とは「美しいと感じて見る」ことです。

二 出典は、太宰治「犠牲」。

作者十七歳のときの短編ですが、問題文では原文のはじめの10行ほどが省略されていて、そこを読むと、誠二は中学生になったばかりだということ、母には村のにくまれ者である源太の家に遊びに行ってはいけないと言われていたこと、源太と違ってやさしい性格の信一とは仲が良く、その信一と遊ぼうと、数人の友達と源太の家にやって来たことがあります。

問一 傍線の2行前に「こんな時はいつでも弱々しい信一と誠二が一番さきに取り組むことに定まっていた」とあります。

問二 すもうの勝負を判定する人のことで、「ぎょうじ」と読みます。

問三 すもうに夢中な二人に聞こえなかったので、勇ちゃんは「オイオイ引き分けだよ」と繰り返しています。一語という指定ですから、助詞の「だ」や「よ」はつけません。

問四 「眉をひそめる」とは「心配ごとや他人の不快な行為に顔をしかめる」という意味です。

問五 「傍杖を食う」は、「自分とは関係ないことに巻き込まれて災難を受けること」という意味ですから、イの「まきぞえになって」が正解です。

問六 傍線と同じ行から次の行にかけて、「その声もオドオドして震ってまでいた」とあります。誠二は信ちゃんの血を見て、不安になったのです。アは「まわりの友だちに怖がりだと気づかれてはいけない」が、イは「信ちゃんが一番不安であろう」が、ウは「信ちゃんの怪我は本当は大したことない」が、それぞれちがいます。

問七 誠二は信一を傷つけたのは自分だと思いこんでいるので、信一も友だちに向かってそのように言っているものと勘違いしたのです。

問八 信一のお母さんは源太のおかみさんでもあるということは、源太は信一の父親になります。

問九 傍線の直前に「誠二は源太の家から早く行こう、逃げようと思った」とあります。けれども、そうすることは罪なことだと思えて、誠二はその場にとどまり、信一のお母さんに、信一とすもうをとったのは自分だと告げることになります。ですから、「罪」とは、イの「自分が信ちゃんを傷つけたことを黙ったまま逃げること。」になります。

問十 傍線の直後に「源太とばかり思っていたのにこれはまた信一のお母さんだった」とあります。源太に殺されるかもしれないと恐れおののいていたところに、優しいお母さんが出てきてくれて、ほっと安心しているのです。

問十一 真相を知らないのは誠二だけです。友だちは皆、勇ちゃんがしたことだと知っています。ですから、誠二自分が悪かったような言い方をして信一のお母さんに謝ったことが不思議でならないのです。

問十二 勇ちゃんの犠牲になるとは、勇ちゃんのかわりになって責任を引き受けるという意味で、五字以内で言いかえれば「身代わり」になります。

問十三 傍線の直前で、誠二は真相に気づきます。そして「かんにんしてネ」と信一のお母さんに言った言葉が、自分では「謝罪」のつもりだったのに、友だちには「勇ちゃんの罪を着た」と思われていたことを知って苦笑をしたのです。

三 出典は、樋田劭編「地球をこわさない生き方の本」。

現代はゴミが大量に出る時代ですが、筆者は、ものを大切にする暮らしにもどさないと、人間同士の心のつながりが断たれてしまうことになるだろうと警告を発しています。

問一 直前の「満足感」を否定的にとらえています。「うわべだけ」という意味の「表面的」を選びます。

問二 「ものに対して淡白になっている」と「物欲のとりこになっている」ことは、ちょっと見ると両立しないように思われます。

問三 傍線の4、5行あとに「ものの生命を大事にする暮らし」とありますから、これを「ものの生命を大事にしない暮らし」に変えます。

問四 傍線を含む文は複文です。「親と子の関係も～接点が少なくなっている」のです。

問五 傍線の1行あとに「世代を超えて結ばれる人間の関係」とありますが、同じ内容を十二字以内で表したもののは、その9行前の「人間同士の心のつながり」です。

問六 a イもオも入りそうですが、原文ではオの「つまり」になっています。

b 逆接のエ「ところが」が入ります。

c アもウも入りそうですが、原文ではウの「たとえば」になっています。

問七 「苦にならない」で、「つらくない」の意味です。

問八 「やらされる」「しいられる」「おしきせの」といった言葉が適當でしょう。

問九 最後の形式段落で「生きた自然の中から与えられたものをもとに生活しているときには、生きた自然に返せばよく、ゴミの問題はおこらなかった」のように、まとめられています。